再出発

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
再出発

【Ｎコード】
Ｎ２４１３Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
ドラゴンクエスト５の石化シーンを自分の解釈で書いてみた。
主ビア前提。

※サイト、ｄノベ転載

再出発

優しい光に包まれ、徐々に視界が開けてきた。
硬直していた体が、ゆっくりとほどけていく感覚があった。
試しに手を動かしてみる。動く……。
そして、まだ固いままの名残を残す体を静かに持ち上げた。

「坊ちゃん！　わかりますか、サンチョめでございます！」
「……サンチョ……」
乾いた感じがするが、声も出すことができた。
「おぉ、気がつかれましたか！　さぁ、坊ちゃん達、お父上ですぞ」
その言葉に、側にいた子供達は嬉しそうに近づいてきた。

「あなたが、僕のお父さんなんですね！　ボク、お父さんのことたくさん探したんだよ！」
物心つく前にはいなかったためか、どこか他人行儀に言う少年。
「レックス……？」
僕は少年に目を向ける。その眩しいぐらいに輝く金髪には見覚えがあった。
「はじめまして、お父さん。わたし、タバサです」
しっかりした口調で、正式な礼を取って少女は言った。
その仕草も、誰かさんを思い出させた。
「タバサ……」
「この名前、お父さんがつけてくださったんですよね。サンチョおじさんからいつもお父さんのことは聞いてました。お母さんのことも……」
「世界が大変だってことも！」
レックスは負けじと言う。
「お父さん！　ボク達と一緒にお母さんを助けに行こう！　それで、

悪いヤツをやっつけて、ボク達で世界を救うんだよね！」

あぁ、まさか、それじゃあ、この子達は……。
僕は複雑な予感が膨らんでいくのを感じていた。

「そして聞いて、お父さん！　ボク、お父さんが残していった天空の剣装備できたんだよ！」

少年が手に持っていたのは、天空の剣。
父から受け継ぎ、常に肌身離さず持っていた剣。
見間違うはずがない。何よりその輝き。
あるべき持ち主の手にあることで、さらに誇らしげに輝いているように見えた。
そして二人からは、華奢な体とは違い、様々な難関をくぐりぬけてきた　意志の強さを漂わせていた。

――あぁ、何てことなんだ。

僕は待ち望んでいた。この瞬間を。
だが、同時に望んではいなかった。この瞬間を。
喜んでいいのか、悲しんでいいのか、僕はたまらず自分の子供達を抱きしめた。

「お父さん……？」
子供達――レックスとタバサは戸惑っているようだったが、僕は耐えられずきつく抱きしめた。
目頭が熱くなり、息が漏れそうになった。
サンチョは察したようで、
「さぁ、坊ちゃん達、そんなにいっぺんに色んなことを言われても。ここはひとまずグランバニアのお城に戻ることにしましょう」

僕もその声で落ち着き、二人から離れた。
「あぁ、そうだね。ちゃんと落ち着ける場所で、ゆっくり話をしようか」

そう言う僕の胸には、重いものがのしかかる。

君らにこの重みを背負わせたくなかった。
君達の生きる時代は平和であって欲しかった。
願わくば、君達には安らかな時をいつまでも過ごして欲しかった。

だが、そこでふと昔聞いた言葉を思い出した。

――一緒に旅をしていれば、守れていたのにと、後悔しています。

そうだ。だから僕はビアンカを一緒に連れていくことにしたんだ。
なってしまったことを嘆いてもしょうがないこと。
そうして、僕が離れてしまった間に、ビアンカは行方知れずとなった。
ならばこの子達も……。

僕が守っていかなければならないんだ。

城に帰った時の皆の喜びようは凄まじかった。
互いに抱き合い、泣き、大騒ぎだった。
その空間は、とても心地よかった。
歓迎されている。それは僕がここにいていい証。
自分の居場所があり、それを迎えてくれる人々がいるということの幸せ。
それを思い切りかみ締めていた。

それだけで幸せなんだ。そうなんだけど。
この場に、君がいれば、よかったのに。
手に入れると、さらにその上を欲してしまう。

「お父さん」
どうやら僕はその思いが顔に出ていたようで、レックスとタバサは心配そうに僕の顔を覗き込んだ。
「心配しないでね。私達だって今まで旅をしてきたんだよ。お父さんの手助けできるぐらいに強くなってるんだから」
タバサは笑顔で言った。
その笑顔はビアンカに似た柔らかいもので、安心できる心地よさがあった。
こんなところに君の面影があるなんて。
「僕だって！」
レックスも負けじと言い張る。
「あぁ、ありがとう。父さん、それについては全く心配していないよ。これからもよろしく頼むよ、レックス、タバサ」
レックスとタバサは、嬉しそうに笑った。
やっぱりその笑顔は、ビアンカに似ていた。

君はよく僕に言ってくれたね。

――あなた、一人で何でも抱え込みすぎなのよ。一人でできることなんてたかが知れてるのよ。私もいるんだから、一緒に行きましょう。

一緒に。君はよくその言葉を僕に言っていた。

次の日の朝。
「お父さん！　お母さんを助けに行くんでしょ！　僕達も連れて行

ってよ！」
「私サンチョおじさんから聞いて知ってるの。お父さんも、私達ぐらいの頃、パパスおじいちゃんに連れられて旅に出たこと。だからね、私達も父さんについてくって決めたの！」
僕は思わず笑みが出た。

そう、一人でできることなんてたかが知れてる。
「あぁ、そうだね。『一緒に』行こう」

僕らは行くよ。君を助けに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2413t/

再出発

2011年5月31日12時37分発行